

St. Luke's International University Repository

学生生活の実態（調査報告）:(その2)看護に関する内容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内山, 芳子, 伊藤, 育子, 内山, 明子, 西尾, 美恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/79

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



(その2) 看護に関する内容

内 山 芳 子 伊 藤 育 子
内 村 明 子 西 尾 美 恵 子

本学は看護の単科、大学としての特性を持ち、創立後50年以上の歴史がある。本学入学希望者のほとんどが自から看護の道を志していることは、入学試験面接時に確認されている。一口に看護と言うが、その内容は看護科学、看護実践、看護教育、看護管理などその活動範囲は広い。看護と言う一般的概念に憧れた学生が、“どのような動機”で本学に入学したか。また入学後、学習経過に従って看護を理解し、“自己の入学時持っていた看護概念がどのように変化”しているか。看護学実習場の中で“看護婦(看護実践者)が学生にどのようなイメージ”を与えているか。さらに卒業後就職するにあたって“どのような条件で職業選択”をするか。将来、結婚と言う問題が起った時、母親と妻の役割を負いつつ職業人としての活動は度々難しいと言われている。この問題について学生たちは、現在“結婚と職業”についてどのように考えているかについてアンケートの調査結果を報告する。

アンケートの結果から

看護を志した動機—本学は単科看護大学であり、当然看護を志して入学したものと思われる。しかし看護を志す動機としては、いくつかの因子が考えられ、一応、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳに大別した結果は表Ⅰのようである。即ち、Ⅰ 職業的因子・Ⅱ 学問的因子・Ⅲ 自己的因子・Ⅳ その他、に分け学年別に分析してみると、各学年共にⅠ 職業的因子が高く44.7%~55.3%、全学生162名中82名(50.6%)が答えている。各学年共にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの順位で同傾向を示している。学問的因子が27.1%、自己的因子は14.1%であった。これらは設問2 あなたは看護を志した動機は何でしたか、の第一順位を集計したものである。なお、今回答に無回答が3名(3年生)、なんとなくが1名(4年生)があり、無回答数は少ないが上級生に片寄っている。しかし大多数の在校生が(97.5%)看護を志した動機をはっきりしていたことがうかがえる。

入学後の看護に対する気持の変化

本学に入学して看護に対する気持の変化の有無について

表Ⅰ 看護を志した動機

(因子分類別にみた学年間の推移)

学年	因子	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計
		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)
1		21 (44.7)	13 (29.5)	8 (18.2)	2 (4.5)	44 (100)
2		21 (55.3)	11 (28.9)	4 (10.5)	2 (5.3)	38 (100)
3		22 (50.0)	10 (22.7)	7 (15.9)	5 (11.4)	44 (100)
4		18 (50.0)	10 (27.8)	5 (13.9)	3 (8.3)	36 (100)
計		82	44	24	12	162

Ⅰ 職業的因子；職業的認識として、アンケート設問項 G.H.I

Ⅱ 学問的因子；学問的認識として、アンケート設問項 B.C.D.F

Ⅲ 自己的因子；自己実現的認識として、アンケート設問項 T.K.M.E

Ⅳ そ の 他；Ⅰ~Ⅲ以外のアンケート設問項
但し、設問Aを第一順位に答えたものについては第二順位の答を該当因子に分けた。

て質問した。表Ⅱ 入学後看護に対する気持の変化(その1)のようである。看護に対する気持に変化があると答えた学生が75.9%を示め、その内訳を具体的に記入した。入学後看護に対する気持の変化(その2)をみると殆んどどの学生が教師の期待するよい方向への変化であり、3年生の「はい」40名(24.7%)の高い値は、実習を通じ看護実践の場に遭遇して著しい変化を示したものと考えられる。今回の調査では、一般的傾向の把握にとどまり、今後は入学前の看護に対する考え方、変化した理由、変化した時期、又どのように対処して来たかなどの調査が教育上必要と思われる。(Positive 回答は93(57.4%)、Negative 回答は18(11.1%)、無記入51(31.5%)であった。)

表Ⅱ 入学後看護に対する気持の変化(その1)

学年	1	2	3	4	総 計
答	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)
は い	31 (9.1)	28 (17.3)	40 (24.7)	24 (14.8)	123 (75.9)
いいえ	12 (7.4)	9 (5.6)	4 (2.5)	11 (6.8)	36 (22.2)
無記入	1 (0.6)	1 (0.6)	0 (0.0)	1 (0.6)	3 (1.9)
計	44 (27.2)	38 (23.5)	44 (27.2)	36 (22.2)	162 (100)

入学後看護に対する気持の変化(その2)

内容	Positive	Negative
学年		
1 年	入学前は看護へのあこがれ、現在は看護の重要性がわかった	- 精神的抑圧で気がくるいそうだ - 看護の独自性に疑問 - 将来の職業として疑問
2 年	- 単なるやさしさだけでは看護は成り立たず、科学性が必要である - 社会一般からみたつまらない仕事という観念は消えた	- 独自性が何であるか疑問 - きつすぎるカリキュラム - 看護学の確立がなく不安定な状態 - 失望した

3 年	- 看護がより近いものとして感じられる - 看護のむずかしさ、重要性を知り大変だがすばらしいと思えるようになった	- とてもむづかしくて、ついていけそうにない - 職につきたくない - 看護のむづかしさ、厳しさに、出来そうにないという不安
4 年	- 入学前よりやり甲斐がある - 看護の持つ範囲の広さ、人間を学ぶ面白さ、かつ看護に対するほこり、使命感を持つようになった	- 理想と現実のギャップが大きくて、不安定さを感じる - 世間でいわれる大変さを痛感 - 看護婦になりたくない

看護婦に関するイメージ

箇条書きに回答されたものをⅠ 人間像・人間関係に関するイメージ(看護婦の)、Ⅱ 社会的(職業を含む)認識に対するイメージ、Ⅲ 労働条件・経済等に関するイメージ、その他に分類し、その内容を3段階(+)肯定的イメージ、(-)否定的イメージ、(0)どちらでもない、とその他に分類しその結果は表Ⅲ 看護婦に関するイメージに示した。全学生162名中回答者は151名(93.2%)、回答件数は419であった。全回答数からはⅡ 社会的(職業を含む)認識に対するイメージが一番多く191(45.6%)、次いでⅡ、Ⅲの順である。学年別にみると高学年に

表Ⅲ 看護婦に関するイメージ

学年	類別	Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ			その他	計 (%)
		(+)	(0)	(-)	(+)	(0)	(-)	(+)	(0)	(-)		
1		13	2	7	10	8	27	3	12	15	2	99 (23.6)
2		16	4	5	30	5	17	1	9	9	3	99 (23.6)
3		19	0	12	27	6	22	3	4	14	0	107 (25.5)
4		26	12	21	29	4	6	1	4	10	1	114 (27.0)
小 計	(%)	74 (17.6)	18 (4.2)	45 (10.7)	96 (22.9)	23 (5.5)	72 (17.2)	8 (1.9)	29 (6.9)	48 (11.5)	6 (1.4)	419 (100)
計	(%)	137 (32.7)			191 (45.6)			85 (20.2)			6 (1.4)	419 (100)

Ⅰ 人間像、人間関係に関するイメージ

Ⅱ 社会的(職業を含む)認識に関するイメージ

Ⅲ 労働条件、経済等に関するイメージ

記号 (+) 肯定イメージ

(-) 否定イメージ

(0) どちらでもない

看護婦に関するイメージの分類例

学 生 の 表 現	分 類
忍耐を持った人	I (+)
頭の切れる人	I (+)
個人によりさまさま	I (0)
社会性人間性を欠く	I (-)
疲れる	III (-)
忙しい、多忙	III (0)
やろうとすれば無限にひろがる世界に生きる人	II (+)
社会に良く理解されない存在	II (-)
学生時代とは全く違った職業人的イメージ	II (0)
重労働だと文句言いながらよく働いている	III (+)

なるに従って回答数が増加する傾向がみられる。以下肯定的イメージを(+)、否定的イメージを(-)、と表現する。(+)は全回答数の42.4%を占め、(-)は39.4%であった。(+)の多いのはII 社会的(職業を含む)認識に対するイメージ(53.4%)、次いでI 人間像・人間関係に対するイメージ(41.6%)で、III 労働条件・経済等に関するイメージは非常に少ない。(-)の回答数は165(39.4%)で、多いのは、II 社会的認識(職業を含む)に関するイメージで72であり、やはり現在の労働条件、低賃金に対するイメージは深く学生の眼を通して確められている。

職業選択の条件

学生に12設問の中から職業選択の条件について第1位を選ばせその内容を4つの因子、経済的因子、職業が持

表IV 職業選択の条件

学 年	1	2	3	4	計
条 件					
経 済 的 因 子	6 (13.6)	2 (5.3)	1 (2.2)	3 (8.3)	12 (7.4)
職業が持っている社会的意味	0 (0.0)	1 (2.6)	1 (2.2)	1 (2.7)	4 (2.5)
自己実現の場	34 (77.3)	33 (86.8)	39 (88.6)	29 (80.6)	134 (82.7)
そ の 他	4 (9.0)	2 (5.3)	3 (6.8)	3 (8.3)	12 (7.4)
計	44 (100)	38 (100)	44 (100)	36 (100)	162 (100)

職業選択の4因子と問20の設問

経済的因子 問20のA. B
職業が持っている社会的意味 C. H. I. K
自己実現の場 E. F
その他 D. G. J

っている社会的意味、自己実現の場、その他に分けて集計したものが表IV 職業選択の条件、である。第1位の自己実現の場と考えるは全校学生の82.7%を示し、又各学年別でも各クラスの77.3~88.6%を占めている。全学的にみて第2位は経済的因子とその他が同数であった。

結婚と職業

結婚と看護職についての9項の質問に対しての学生の解答は表V 結婚と職業(1)に示した。B 結婚・妊娠・出産などで中断することはあっても、できるだけ続けたいが各学年ともにトップで38.6~68.4%、全学生では78名(48.2%)を占めている。更にその内容を表VI 結婚と職業(2)のようにグループ分けすると、結婚と職業の両立を考えている学生は108名(66.6%)であった。又A 結婚後も仕事を続けたいと答えた30名について卒業後の職場の選択条件について参照してみると、全く全学生と同傾向を示している。職業優先は15名、108名(66.0%)は結婚と職業の両立を在学中から考えている。女性の職業退職の頻度が高い結婚・出産による退職については28名(17.2%)であった。

表V 結婚と職業(1)

学 年	1	2	3	4	計
答					
A	10	3	13	4	30
B	17	26	18	17	78
C	1	0	5	5	11
D	6	5	2	4	17
E	0	3	0	0	3
H	5	1	4	2	12
F	0	0	0	1	1
G	4	0	2	2	8
その他	1	0	0	1	2
計	44	38	44	36	162

表VI 結婚と職業(2)

内 容	設 問	計(%)
結婚と職業の両立	A. B	108 (66.6)
結婚と出産による退職	C. D	28 (17.2)
職業優先	E. H	15
看護職以外への転職	F. G	9
その他		2
計		162

考 察

アンケートから得たこれらの傾向は、本学学生特有のものなのか、又同世代の他の大学生や看護学校の学生と同傾向のものなのかを比較検討してみると、看護を志した動機については、2・3の調査が行われているが、設問方法が異なり、すなわち多数選抜の項目に対して回答制限を加えないもの¹⁾や、又は自由形式で回答を求め、それを分類集計したもの²⁾で比較対象にはならない。が、これらの内容は今回のⅠ～Ⅲの因子の内容を含んでいるようである。看護を志した動機については徳永の調査によると「看護学院を選んだ特別³⁾な動機がある。」との答が92%あり、本調査では更に高く97.5%を示している。入学後の看護に対する気持の変化については、同じような調査が見当らず比較できなかった。しかし変化があるのが当然あり、現在の教育学習経過の中で、小島の研究の第Ⅰ因子、専門的意識（専門的知識⁴⁾や技術のいる仕事だと思う。忍耐力を要求される仕事だと思う。人間を相手とする難しい仕事だと思う。女性に適した職だと思う。）および第Ⅲ因子職業的自尊意識（女性として立派な職業だと思う。一生役に立つ技術を身につけた職業だと思う。責任感がとても必要な仕事だと思う。）に関係があるように思われる。又否定的回答も少数の答を除いては学生らしく専門職業意識や職業的自尊意識の成長過程と考えるならば、適切な指導により、より好ましい方向へ変容できるものと考えられる。看護婦に関するイメージは類似の調査はあるが方法が異なり比較できない。高橋の調査によると、学生のもつ看護婦像の特徴的⁵⁾傾向として、学生は職場の権威、暗いイメージを感じたところに看護婦像をおき一般社会の認識も不適當だとし、画一的ではあるがそれなりの主張を持っているようにみえたとあり、Ⅲ労働条件、経済等に関するイメージに否定的イメージが多いのは共通しているように思われる。職業選択の条件は、我が国の現代女性の一般傾向として、「なぜ職業についているか」との問に対して、回答⁶⁾者の%が「自分の能力を生かしたい」と答えており、本学学生の職業選択の条件として第1位自己実現の場と考える82.7%と同傾向を示すものと思われる。大学卒業の女性が持つ、収入に関係なく職業持続意志が高いと言う報告と一致して、経済的因子は7.4%と低い。多

数⁷⁾の学生が女性として独立自活の人生を望まず、卒業後数年で平凡ながら“よい家庭生活”を築き、情緒豊かで活動的な主婦として、持てる能力を生かす一最近の社会的役割期待そのものの女性像を呈している。回答内容にもみられるように自分の好ましい条件に合せた、自由な考えで職業選択すると回答した学生が12名(7.4%)本調査でもあった。結婚と職業については、大学卒業の女性で現在職業についている女性の調査によると、仕事を続けたい64.1%、できれば条件を変えて仕事を続けたいが18.6%で80%以上が結婚後も仕事を続けたいと願っている。本学学生もまたその他2名(両立しない、思案中)を除けば、殆んどが職業継続意志を持っていて、それも非常に高い。女性として大学で得た知識を家庭内の看護にとどめず、社会に出て広い活動分野から看護を社会に還元する姿勢がみられる。

結 論

看護を志した動機は、多くの看護学校の入学者と同様、更に高い数値ではっきりとその因子(理由)が表示されている。4年生大学、短期大学ともに女子学生が「職業に役立つ」学科を専攻するのは30%を占めるにすぎない中で、職業的に本学入学を希望した学生が半数在学していることは意味深いことである。入学後の看護に対する気持の変化も、学習の経過の中で困難に動揺しつつも自分が選んだ学科に真摯に取り組んでいる学生が多数ある。看護がまだ一般社会によく認識されない点については、先輩として積極的に社会に看護の重要性を認識させ、社会の要求に答えられるよう教育を刷新する必要がある。職業選択の条件については、現代の若い女性一般と同傾向を示し、職業を選択しているにもかかわらず、職業選択の条件の項で前述した如く、最近の社会的役割期待そのものの女性像が現われている。結婚と職業については、大学卒業の女性と同様に高い職業継続意志を持って社会に出て活動したいとの希望がうかがえる。本調査を担当した看護教師としては、学生に、初志貫徹し、本学の理念に基いて社会の要請に対応できる看護の役割を負い、人間の健康に寄与できる職業人として、出来るだけ長く社会に貢献してもらいたいと願っている。

- 1) 看護学校入学者の動向、前原澄子他、看護教育 Vol. 16, No. 3, 1975
- 2) 看護の認識調査、丸橋佐和子他、看護教育 Vol. 12, No. 7, 1971
- 3) 看護学生の意識調査、徳永清、看護教育 Vol. 11, No. 1, 1970

- 4) 看護学生の職業意識の形成に関する研究、小島礼子、看護研究 Vol. 8, No. 1, 1975
- 5) 学生の看護婦像に関する研究<第一報>、高橋章子他、看護研究 Vol. 5, No. 4, 1972
- 6) 「男と女」朝日新聞学芸部調査
- 7) 現代女性の意識と生活、吉田昇他、NHKブックス 237、昭和50年

参考文献

1. 石原幸子、看護婦の職業的信念（弁証法的看護の把握）、看護教育 Vol. 8, No. 11, 1967
2. 長谷川浩一、看護婦の意識に関する研究（Q—技法による検討）、神奈川県衛生短期大学紀要 I、1968
3. 徳永清他
 - 第1講 現代看護学生の特性、看護教育 Vol. 11, No. 1, 1970
 - 第2講 学生指導の理念、看護教育 Vol. 11, No. 2, 1970
 - 第3講 学生指導の領域、看護教育 Vol. 11, No. 3, 1970
4. 丸橋佐和子他、看護の認識調査（看護学生と高校生を比較して）、看護教育 Vol. 12, No. 7, 1971

5. 高橋章子他、学生の看護婦像に関する研究—第1報—、看護研究 Vol. 5, No. 4, 1972
6. 氏家幸子他、大阪大学医療短期大学部看護科学生の動向（入学生の看護に関する意識）、看護教育 Vol. 15, No. 3, 1974
7. 高橋佐和子他、看護高校生徒および看護短大学生における職業観の発達に関する研究（職業観診断テストの結果分析）、看護教育 Vol. 15, No. 8, 1974
8. 小島礼子、看護学生の職業意識の形成に関する研究、看護教育 Vol. 8, No. 1, 1975
9. 前原澄子他、看護学校入学者の動向、看護教育 Vol. 16, No. 3, 1975
10. 吉田昇他、現代女性の意識と生活、NHKブックス 237, 1975

（その3） 学生の実習に対する意識について

岩井 郁子 伊奈 侑子
鈴木 篤子

はじめに

看護教育において、その教育方法の一つである臨床実習の意義、位置付けは大きく、教育目標を達成する上で、欠かすことのできないものである。臨床実習は、学生側に主体性があり、知識と技術の統合と応用が要求され、それと同時に病院という特殊な小社会の中で、学習をすすめてゆかねばならない。臨床実習をより効果的な教育方法として、展開してゆくためには、種々の観点から実習を評価、検討してゆくことが大切である。その中の1つとして、現代学生気質および学生のニーズを把握し、それらを実習指導の中に生かし、学習効果をあげようと考えた。実習は一方的に教授する講義形式と異なり、学生が主体的にとり組まねば充分な学習効果が得られない。その臨床実習を効果的にする為に1. 実習に対する満足度、2. 実習へのとりくみ方、3. 臨床指導者に対する学生の受けとめ方の三つの観点から若干の検討を試みた。

I 本学における臨床実習の概要

1. 四年間の臨床実習の進め方

本学における臨床実習の展開は、図1に示す通りである。臨床実習は3年次に集中している。1単位90時間¹⁾

で、4月～12月まで、3年生（45名）が4つのグループに別れ、成人看護学3単位（外科系1.5単位、内科系1.5単位）、母性看護学1.5単位、小児看護学1.5単位履修する。一週間の総実習時間は23時間である。

図1

	4月	10月	12月
	前	期	後
1年			基礎実習 ←→ 0.5単位
2年			基礎実習 ←→ 0.5単位
3年	成人、母性、小児 (1.5単位/6W)	6単位	精神科 1単位
4年			卒業看護研究 ←→

2. 実習方法

臨床基礎実習、成人、小児、母性看護学の実習とも、受持患者を中心とした実習である。実習時の受持患者数は、学年、学生の能力、実習目標によっても異なるが、

- 1) 昭和51年度学則改正により実習は1単位45時間に変更となった。